

# どんな雰囲気なのか感じてもらう 世界と自分は地続きになっている その実感と自信は大きな力になる



永田 和宏

## 11 世界武者修行

### 一步先のあなたへ

今月の初めから、私の研究室の修士課程1年の大学院生S君を、アメリカに送り出した。シカゴに近いエヴァンストンという町にノースウェスタン大学があり、そのRichard Morimoto教授の研究室で研究をさせてもらうためである。

彼は日系三世であるが、日本語は話せない。三十年来の古い友人である。アルツハイマー病やパーキンソン病などは一般に神経変性疾患と呼ばれるが、彼はタンパク質の変性や加齢による神経変性疾患研究の世界的な権威である。

前任の京都大学時代から、私の研究室では修士課程に入学してきた大学院生を、まずは三カ月間、世界の一流の研究室へ派遣するという独自のシステムを作ってきた。

狙いは二つある。論文でしか見たこともないような、世界の先端を走っている研究室では、どんな雰囲気の中、みんながどんなモチベーションをもって研究を進めているのか実際に感じてもらおうと一つ。もう一つは、英語しか通じない環境のなかでどこにもかくにも生きのびてもらうこと。

まだ実際に研究を始めてもない学生を、一気にそのような場に送るのはいささか冒険ではあるが、効果にはめざましいものがある。とても手が届かないと思っていた最前線の研究が、

実は自分たちと地続きのものであることを実感して帰ってきてくれることは、そのもっとも大きな目論見であり、成果である。講義で教えられる知識は、遠い世界からやってくる知識である。「学ぶ」ということは、世界の「偉い人たち」が成し遂げた発見や、一方的に自分のなかに取り入れるという形では実感されてこなかった。



しかし、大学院という場は研究の場である。一方的に学ぶという形から、能動的な研究への一大転換をしなければ、そこに籍を置く意味はない。大学院では、あくまで「自らが研究をする」というのが基本である。「教えられる」から「自ら行う」研究への意識のシフトは、そう簡単ではない。

小学校から数えて十数年、ひたすら教えられることに慣れすぎてきた。知識は向うの世界のもの、自分などが関与するものではないと刷り込まれてきたと言ってもいいだろう。当然の帰

結として、教科書に書かれている事柄は、自分などには関係ない、とても及ばない世界のことだと思ってしまう。膨大な知識体系の前に、萎縮してしまわざるを得ない。

私が日常的に若い諸君と接している、もっとも歯痒い思いをするのは、この消極的な自己規定なのである。「私などにはとても」と端から恐縮して思っている。そのような消極性は、必ずしも研究の世界だけのことでなく、世の中全般への接し方を見ても、むしろかたがた誰かに考えてもらって、といった消極性に繋がる。



世界のトップのラボに滞在して、彼らと議論しながら研究をさせてもらう。科学的な成果は三カ月では得られなくても、より大切なものを得て帰ってくる。それは、なんだ自分たちのやっていることと変わらないうじゃないかという実感である。

とても手が届かないと思いついてきたが、実際には日本で(永田研究室で)やっているのと同じことをやっているんだと思えること、それは自分が世界と地続きになるということである。その実感と自信は、その後の研究を推進する大きな力となる。何年にもわたって多くの学生を派遣してきて、その「世界と自分と同じ地平に立っている」という認識を得てくれることが、私のこのささやかな試みの最大の成果でもある。

三カ月後に、件のS君がどんな顔をして帰ってくるのか、楽しみにすることである。



荒波

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人

※コラムへの感想をメールでお寄せください。minna@mb.kyoto-np.co.jp